



Title	ドノソの『ブルジョア小説3篇』について
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1981, 7, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93603
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドノソの『ブルジョア小説3篇』について

吉 田 秀 太 郎

はじめに

ドノソ (José Donoso 1924—) の出現によって、これまでチリの文学の主流をなすものは詩であると言われていた一般的な認識に大きな変化がもたらされたことは確かである。事実、詩の分野では遠くは *La Araucana* の作者 Ercilla にはじまり、今世紀に入ってはいわゆる創造主義の生みの親でもある Vicente Huidobro, そしてノーベル文学賞に輝く Gabriela Mistral や Pablo Neruda, 更に近くは Nicanor Parra や Enrique Lihn など多くの傑出した詩人を輩出している。しかし、小説の分野においても、決してこの国は不毛であったわけではない。いや、むしろ、たとえばラテン・アメリカのバルザックと自他共に認められている Blst Gana を生んだのもチリであったし、Latorre, Baldomero Lillo, Rojas など国境を越えて知られていることからわかるように、すぐれた伝統をもっているのである。ただ、これまで概してイスマノアメリカの文学に対する世界的な評価が、というよりも認識があまりなかったために、国際的な文学賞を得ることによって、その作家ないし詩人の存在だけがすべてを代表するような風潮が無きにしもあらずであった。今世紀の半ば以降、特に1960年を一つの出発点とするラテン・アメリカ文学の「ブーム」の中で、この大陸の文学が世界的に注目されるようになり、同時に作品の質と量の両面において画期的と言うか、飛躍的な向上を見たことは周知の通りである。こうした波に乗ってはなばなしいデビューぶりを示したのが Donoso であり、同国人としては Jorge Edwards だった。そして二人とも、チリ文学における小説に新しいページを加えたのみならず、イスマノアメリカの代表的な現代作家となった。

ドノソの作品について触れる前に、彼の伝記的な側面についても述べておくべきかも知れない。しかしこの点については、彼の *Historia personal*

del "boom" の中で、更にはすでにわが国にも紹介されている彼の若干の作品の巻末にかなり詳しく述べられているので省略したい。¹⁾ただ、彼がチリの中産階級の出身であり、医者や弁護士的生活を身近に観察できる状況にあったこと、そして最近の約10年間をスペインで過ごしているという事実は、これから取り扱おうとする作品と関係があるので述べておく必要があるだろう。

『ブルジョア小説3篇』は1973年に発表された。それまでにも彼は1955年に *Veraneo y otros cuentos* を、1960年には *El charlestón* を、そして1958年には小説 *Coronación* を、また1966年には *Este domingo* (『二の日曜日』) を、続いて1967年には *El lugar sin límites* (いずれも小説) を、そして彼の最も代表的な作品とされている *El obsceno pájaro de la noche* (『夜のみだらな鳥』) を書いていて、小説家としてのドノソの評価はすでに不動のものになっていた。ところで、そうしたドノソの従来の作品と『ブルジョア小説3篇』との比較において、若干の目立った特色が後者にあることに気づくのである。そのうちの一つは、さきに述べた一連の作品が、地域的に多少の隔りはあるにせよ、おしなべて彼の母国チリを舞台にしたものであったのに対して、今回の作品ではそれがスペインはバルセローナを中心とする地域である、という点であり、もう一つの大きな違いは、小説の素材の扱い方に関するものである。1973年以前の彼の作品では、チリにおける崩壊しつつある古い上流社会と抬頭する無産階級とを対照的な形で描いたものがほとんどであった。たとえば *Coronación* における没落貴族の最後を飾る Elisita 夫人の、老衰し、恍惚の人となりながら女王の冠を戴く幻想の中で生涯を閉じる過程と、彼女の一人息子 Andrés の無気力な生活に対して、田舎から上京した若い家政婦とその恋人 Mario の溢れんばかりの生氣と若さが非常なコントラストをなしている。ちなみに、このような社会を描いた作家として、自然主義の大御所、Blest Gana とその *Martín Rivas* が思い出される。また、例の『夜のみだらな鳥』においても事情は同じである。首都サンティアゴの南部の広大な個人所有地内にある一種の養護施設を舞台にして物語りは展開するが、そこに描かれているのはインブンチェ (インブンチェとは、チリの土着の迷信における奇怪で醜悪な魔物の名前である) の世界に閉じこめられ、その中でうごめくみじめな人間たちと大地主の姿である。従って、『ブルジョア小説3篇』

の出現を見るまでの批評家たちの一致した意見として、ドノソの作品は社会の両極端に位置する人間の描写に限られ、いわゆる中産階級を描いたものに欠けていることを指摘してきた。もっとも、ドノソの場合、従来よく見られた社会主義レアリズムと称せられるものとはその作風において異っているのではあるが。ところが、この作品が現れたことによって、これまでの評価は当らなくなってきた。

さて、『ブルジョア小説3篇』は、原題が *Tres novelitas burguesas* となっていて、*novelitas* という縮小辞のついた単語からもわかるように、小説とはいえ、どちらかといえば短い方の中篇小説3篇から成り立っている。これら3篇の作品がいずれもバルセローナとその近郊を舞台にしたものであることはすでに述べたが、その理由として、作者ドノソがこの地に住むようになってから約10年になり、土地の事情にかなり詳しいことがあげられるが、しかし彼のこの生活体験だけが唯一の理由であるはずは勿論ない。いわゆる中産階級の生活を描く場合、この都市がいろいろな好条件を備えていることも見逃がしてはならないだろう。スペインの諸地域の中でもバルセローナは自主独立と進取の気性に富んだ、そして盛れな商業活動に裏うちされた、豊かなカタルーニャ地方の中心都市であり、近代的な都会ならどの都市にもあるさまざまな人間関係や社会問題を扱う上で、極めて好都合であると言える。作者は恐らく、この作品に現代性と普遍性を持たせるための条件づくりとして、この土地を選んだように思われる。次に3篇の作品について、順を追って述べてゆきたい。

『チャタヌーガ・チューチュー』または社会風刺

言うまでもなく、この作品の題名は1940年頃にアメリカで流行した歌からとったものである。グレン・ミラー楽団と、アンドリュース姉妹を思い出させるこの題名から連想されるものは、やはり軽薄な雰囲気である。事実、この小説には「軽薄をてらうインテリたちやインテリぶった軽薄な連中」(p. 16)²⁾が登場している。写真出版社の経営者、医者、インテリア、デザイナー、ファッションモデル、建築家、そして変ったところではプロボクサーの顔も見える。1940年代のアメリカの歌や服装がリバイバルした頃のバルセローナの社交界に集まる人びとは、いずれも *gente divertida* と呼ばれるにふさわしい雰囲気をもっている。

建築家 Ramón とその女 Sylvia,そして「私」,つまり医者である Anselmo と妻の Magdalena, この2組の男女の関係を告白の形で描いたのがこの作品である。「朝食やシャワーよりも先に目のメーキャップをせずには落ち着けない」ファッション・モデルと「私」との関係が、とりわけ、物語の中心をなしている。写真出版社の Roig 氏宅での夕食会で知り合った翌日、「私」は Ramón と Sylvia の住む郊外の別荘に招かれるが、Ramón が急用でバルセローナにひとり戻り、「私」と彼女はそこに取り残された形になる。そして遂に彼女を愛してしまい、彼女との愛を重ねたあと、ふと気がつく、「私」の祖母と García Lorca がかって sitio del pecado と呼んだものが不能に陥っている。Sylvia の vanishing cream によって消されたせい、それとも Magdalena を裏切ったことに対する罪悪感によるものかと「私」は当惑する。その様子がユーモラスに、あるいは皮肉をこめて、克明に描写される。妻に気付かれないようにと、夜おそくまで病院に残っていたり、友人からのコンサートへの招待をよいことに外出したり、同僚の医師に相談すべきかどうか迷い、Sylvia が妻に電話して、万事露見するのではないかと心配、また、Ramón や Sylvia からの電話におののき、Magdalena が Sylvia のことで、…pero quizá pueda comunicarme con ella と言ったときの comunicarme の内容を想像して慄然とする。仮病をつかって寝込んだり、Sylvia と妻の会う日が近いのを知って、わざと口実を設けて妻と喧嘩をする。しかし万策尽きて、結局「私」は不能となったわが virilidad について彼女に告白する。と不思議なことに、彼の男性は復活する。Magdalena はすでに夫の身の上におきていたことを Sylvia から聞いていた。「私」の男性は、ちょうど Sylvia の顔の色んな部分が自由に化粧によって組み立てられたり分解されたりするのと同様、Sylvia によって解体され得る一つの付属品と化していたのである。これまで男性が女性に対して行ってきたのと同じことを、今度は女性が男性に対して行っているのである。性を権力のシンボルとして、女性にそれを握らせたところに、作者の風刺家としての一面が窺える。Sylvia ははじめ、単なる受身的な女性に過ぎなかったが、「私」との関係が成立した途端、命令する女性になる。別荘での彼女は明らかに女主人であり、「私」はその下僕になっている。妻の Magdalena についてはどうか。彼女は貞淑な女性だと「私」は信じているが、しかし、あるパーティーで Sylvia と並んで Chatanooga choo choo をうたい、踊

る姿を目のあたりにして、どこでこんなことを覚えたのかと、今更のように、妻の未知の部分に驚く場面がある。

この作品には、バルセローナの中産階級の生活が、一種のユーモアと風刺の下に描き出されている。華やかな雰囲気の中に息づくさまざまな人間像が鮮明に浮き彫りにされていて、ストーリーを盛り立てるのに役立っている。この作品の題名にはじまり、登場人物の生活態度からくる社会の軽薄さが中心的なテーマになっていることは明らかである。別荘地のマンションの豪華な雰囲気を示すために、作者は立派な化粧室の描写に力を入れているが、その中で、「私」がふとこの化粧室を見てシルビアを連想するくだりがある。

「私はすぐ Sylvia を思い出した。そう、シルビアには、一流の建築家が費用を惜しまず設計した豪華なホテルの化粧室に似たところがあった。彼女に欠けていたのは、これから使おうとしている人に殺菌剤みであることを約束するあの封をした細長い紙だけだった。(p. 36)

これは人間を機能的なものに合わせようとする現代社会の人びとの物の見方に対する作者の皮肉だと考えるのは言い過ぎであろうか。この作品の中に、評論家ベンデスー氏も気づいているように、³⁾倫理的に制御されたファンタジーのあることは明らかである。倫理的に制御されたファンタジーを用いることによって、人間生活における現実に立ち戻ろうとしていると言えるであろう。ファンタジーを用いることは、現実からの逃避を意味するものでは決してなく、むしろ逆に、それによって現実の深奥にまで分け入ろうとすることを意味している。もう一つ、この作品の中で、物質的に恵まれた環境に馴れた現代の中産階級の夫婦生活に見られる自由な行動、自由な男女関係が描かれているが、これまた極めて微妙な表現によってほのめかされている。Sylvia が Ramón に Magdalena のことをしきりに持ち出し、それが彼の突然の急用という形となってバルセローナに帰ってしまったくだりは、その意味で、極めて暗示的であると言えよう。

それにしても、この作品に何と多くの外来語が用いられていることだろう。先ず47行に及ぶ『チャタヌーガ・チューチュー』の歌詞は全部英語の原文のままだし、folk, week-ends, cock-tail, poster, porno shops, hot-pants, top-hat, charter, boy-scout, forties, swing, vanishing cream, blazer, beige, closet, hippies, women's Lib, などのほか、Kitsch, Ersatz

といったドイツ語の単語や, *cognoscenti* といったイタリア起源のことば, そして, 更に英語に劣らず多いフランス語の語句がほとんどのページにおどっている。その数は余りにも多いので, 敢えてここでは枚挙しないでおくが, ここではたして読者はこれらの意味が全部わかるのだろうか, という疑問を抱かずにはいられない。確かに, こうした外来語にはそれなりの存在理由はあるだろう。その一つとして, 作品全体に一種の現代性あるいはコズモポリタンな性格を持たせるのに役立っていると考えられる。にもかかわらず, われわれにとっては, 多過ぎるように思えるのである。かつて, と言ってもそう遠い昔のことではないが, イスパノアメリカの作家たちは自分たちの作品を買って読んでくれる一般大衆の少なさに絶望し, 大衆を見限って, 自分たちと同じ知的水準にある人びとだけのために本を書いた時代があった。そのせいか, 難解な表現や外国語の多用が目立っていたが, 今日でもなおその名残りとも思われるものが, ひとりドノソだけでなく, イスパノアメリカの現代作家たちの作品の多くに見られるのは奇妙なことである。

『緑色の原子No.5』または精神の荒廃

さきに見た作品の題名が音楽に関するものであるのに対して, こんどは絵に関するものが題名になっている。すなわち, 主人公 Roberto の描いた作品名 *Átomo verde número cinco* からとったものである。Roberto は歯科医であり, 趣味で描いたこの絵を結婚15周年記念日に妻の Marta に贈ったが, この作品が何者かによって持ち去られることによって, 2人の平和な生活に突然危機が訪れる。ストーリーは, この夫婦が長年の借家住いからようやくバルセローナの郊外に建った新しいマンションを買って住むようになり, 家具, 調度品なども趣味のよい, 立派なものを揃えて幸福感にひたっている情景の描写から始まる。主人公 Roberto がアマチュア画家であるという設定の下に書かれた作品だけあって, 新居の壁面に著名な画家の作品がかかっているだけでなく, 文中にも多くの画家の名前が登場し, 主人公たちを取り巻く雰囲気はいかにも高尚で, ゆとりのあるものになっている。しかし, 大切にしていた例の絵が何者かに持ち去られたのを皮切りに, マンションの中のいろいろなものが次々と紛失するに至って 2人の間に15年間の結婚生活で見られることのなかった意見の対立のよ

うなものが次第に表面化し、遂には異常とも言える激しい夫婦喧嘩にまで発展する。

この作品の中には、現代に生きる中産階級の人びとの物の考え方や生活信条といったものが要約されているように思える。経済的にゆとりができ、余暇を利用して趣味に生きようとする主人公の生き方はこの階級に最も顕著な現象であるし、また、絵を持ち去られたときの Roberto の臆測の一つに、もしかしてクエンカの美術館に展示すべく、妻が取りはからってくれたのではなかろうか、という考えがあったが、これもやはり、こうした階級の人間の抱きがちな自惚れのあらわれと見えなくはない。更に、冬の日曜日の朝の、暖房のきいた部屋の中から寒そうに道を行く人びとを眺めてひとり満ち足りた気分ひたる場面、しかも彼は、日曜日だというのに軽い風邪を理由に教会には行っていない。彼のこうした伝統的なカトリック教からの離脱は、この作品の半ば過ぎに出てくる。キリスト再臨派の信者たちの訪問の場面にも見られるのであるが、この階層の人びとに目立つ現象であるように思われるのである。また、『チャタヌーガ、チューチュー』に見られたような、夫婦生活におけるだらしなさと言うか、あのような自由な行動ほどではないにしても、やはり、この作品においてもその種のほのめかしがあることも注目すべき点であろう。Roberto と口論したあと、妻の Marta は家をとび出すが、その行き先は Paolo という、インテリア、デザイナーの許である。

絵が盗まれ、燭台がなくなり、部屋の電球がなくなり、文鎮が盗まれて漆塗りのたんすが運び去られてゆく過程は、われわれの日常生活においては到底おこり得べくもない極めて奇想天外な方法によって描かれていて、われわれには、そんなことがあるはずがないと思えながらも、その描写の巧みさにつられて、いつの間にかそれを受け入れてしまう。それは全く小説の世界における現実である。しかしその描写の深層に作者の意図するものが、述べようとする真実がはっきりと窺えるような気がするのである。犯人を探し求める Roberto が、書斎で見つけた *Peso 108, Átomo verde* と書いたメモを、ペソ通り 108 番地と思い込み、それと彼の盗まれた作品『緑色の原子 No. 5』のありかと結びつけるとき、もはや彼は常人ではなくなっている。*Peso 108* は重さが 108 グラムという意味であり、かつて彼はこの作品に今の題をつけようか、それとも『*Peso 108*』としようか迷

ったことがあったのだ。彼はそのことをすっかり忘れ去っているし、しかもそのメモの文字が犯人の残したものか自分が書いたものかの見分けもつかなくなっている。タクシーに乗った彼とその妻マルタは (Marta も、はじめは分別があつて、夫をたしなめていたが次第にその判断力を失ってゆく) ペソ通り 108 番地という偶然存在した奇妙な場所に着くのであるが、そこで、運転手を犯人だと錯覚し、彼のもっていたボールペンをもぎとる。運転手は驚いて、財布などを投げ出したまま逃げてゆく。ここまで読み進むとき、読者は彼らのその異常さにただ啞然とするばかりである。このメモのことでやがて夫婦はののしり合う (p. 186) のだが、そこにはもはや教養はかけらほども存在しない。路地裏の、明りも消え、まっ暗になった中で服をむしり取り合っているうちに裸になった 2 人は、ふと自分がおそろしくなって互にあとじさりする。ドノソはこの小説の中で、現代人の精神的な荒廃を、また、文化や教養といった仮面の裏にひそむみにくい人間性を暴こうとしているように思えるのである。

『夜のガスパール』または alter ego の探索

ジョゼフ・ラベル作曲の *Gaspard de la nuit* を表題とするこの小説は、『チャタヌーガ・チューチュー』で主要な役割を果たした Sylvia のもう一つの面を描いたものであり、この 2 つの作品によってはじめて彼女の人間像がはっきりと浮かび上がってくる。

Sylvia は前夫と別れたとき、1 人息子の Mauricio を手放した。職業婦人として独立して仕事をしたいと考えたからで、子供のために自分を犠牲にしたくないというのが彼女の信念だった。それから 6 年たち、彼女が国際的にも名の知れたモデルになった頃、16 才になったその息子が 3 カ月の予定で、マドリードから遊びにやってくる。ここからストーリーは始まる。

Sylvia は息子の着ている衣服をもっと派手な、若者らしいものに変えてやりたいし、髪の毛も長くした方が似合うだろうと思う。長い間の親子のコミュニケーションの欠如を一気にとりもどそうと、相手が未成年であるのにたばこをすすめたり、映画にさそったり、海水浴はどうかと尋ねたりして、いろいろと気を遣うが、Mauricio はそうした誘いや質問に否定的な返事しかしない。彼の好きなものといえはただ散歩することだけであり、

彼が絶えず吹く口笛の一種異様な響きに、Sylvia はこの少年の発散する孤独な空気に悪寒のようなものを感じる。自分に、どこかへいっしょに連れて行ってほしいと言ってくれるのを願っていた Sylvia にとっては、息子の態度は余りにも冷淡なものであった。

Mauricio の吹く口笛には、生みの母をも含めた、家族全体に対する不満と、ある種の呪いがこめられている。なぜなら、彼の主体性が、つねにこれらの人びとによって奪われて生きたからである。Mauricio は彼らに対して素直に耳を貸そうとはしなくなっていた。Sylvia が Mauricio と音楽について話させようとして Paolo という友人を家に呼んだとき、彼女は息子の目の前で、Paolo にいかに息子が可愛いかを述べる。しかしながら Mauricio は、それを唯の芝居にすぎないと思うのである。彼がラベルを好きになったのは、マドリードの百貨店のレコード売場で聞いてからであるが、彼はそれを何度も何度も聞き、すっかり自分のものにしていった。そしてそれを、彼の孤独な時間に再生することによって、淋しさをまぎらせようとしたのである。いま、母の家に遊びにきた（といっても自発的にはなく、前夫が海外へ旅行する間、預ってもらうつもりでよこしたのであるが）Mauricio は、母の家でよりも、毎日出かける少し長目の散歩の中でくつろぎを感じるようになっていた。そんなあるとき、彼は広い公園の森の中にはいってゆく。不思議なことに、そこではすべてが、木々も空気も光も、音楽の化身となっていて、もはや彼が口笛を吹く必要はなくなっている。彼の周囲で聞こえる口笛ははじめはぎこちないが、やがて繁みの中には完璧な調べが響きわたる。『夜のガスパール』を口ずさもうとした Mauricio は、そのうたが、まるで乾いた地面に吸いこまれるように消えてしまうのをどうすることもできない。彼は池の向う側に浮浪者風の、彼によく似た1人の少年が昼食のためのガルバンソ豆を煮ているのを見つける。その少年もまた彼を見る。そしていつの間にか2人は互に相手の姿に変身する。Mauricio になったその少年は、Sylvia にバイクを買ってもらい、爆音を立てながら、元の Mauricio のそばを走り抜ける。そして乞食の姿になった元の Mauricio は、すごすごと森の中に向って歩いてゆく。

この小説は、Mauricio という少年の、物質的な、金銭で充足することのできる欲望を避けて、ひたすら自由な、もう一つの自我を求めようとする姿を描いた作品だと言うことができるであろう。彼の口ずさんでいたラベ

ルの曲は、そうした自由への憧憬を象徴している。従って、彼の求めているものが得られようとする瞬間、その曲は、もはや必要ではなくなり、彼の逍遙する森の中に移っていく。Mauricio の浮浪者への変身、そして浮浪者の Mauricio への変身は、とりもなおさず、alter ego を探究する主人公の目ざすところであった。ベンデスー氏は、このことに関連して、興味ある観察を行っている。すなわち、Mauricio という中産階級の少年が——ひょっとしたら一度もそうした階級に属していなかったかも知れないが——浮浪者のあの翼を求め、一方、彼そっくりの浮浪者がブルジョア生活のもつ快適さや快楽といった一種の順応主義を求めていることの中に、あるいは、浮浪者といえども、心の中では結構、ブルジョアなのかも知れない——皮肉めいたものを見出していることである。⁴⁾ ドノソの小説では、この作品に限らず、社会的階層の極端に異なる2つの世界を描いたものであっても、それを社会的リアリズムとして描こうとする意識はなく、むしろ、そうした現実を描くことによって彼独自の小説の世界を築き上げようとする態度が特徴をなしているように思われる。その意味において、ドノソは、文芸批評家 Scholes のいわゆる “fabulator” としての立ち場を堅持していると言える。

結び

『ブルジョア小説3篇』が、それぞれ内容の異なる3つの中篇から成り立っているにもかかわらず、そこに全体として一つのまとまりを見せているのは、この作品の成功を示すものとして評価されて然るべきであろう。作者がこれらの3篇を書くに当って、すでにこのことを念頭に置いていたことは充分推測できる。ところで、これらの作品にまとまりを与えているいくつかの要因の一つとして、先ず舞台の、広い意味での同一性、そして、登場人物の共通性をあげることができる。たとえば『チャタヌーガ、チューチュー』に現れる Sylvia Corday は『夜のガスパール』に再び登場し、前作で触れられなかった彼女のもう1つの人間像を示しているし、前作で「私」の形で登場する Anselmo という人物は『緑の原子 No.5』の中に間接的にではあるが顔を出し、それによって、第1作では描写されなかった彼の肉体的な特徴がはっきりするし、更には第3作で、医者としての彼の力量をも示している。といった具合である。ドノソが第1作を書いたとき、

すでに第3作が構想として存在したと思われるふしがある。Sylviaの美貌と生活経験に触れた個所で、彼女が子供を生んだことがあるらしいという説明がやがて第3作での、Mauricioという少年の姿となって現れていることはその一つの証拠とも言える。Sylviaの新しい男Ramónは、第1作ではただ影のような存在に過ぎないが、第3作ではかなりその横顔がはっきりと見える。インテリア・デザイナーのPaoloは3つの作品にいずれも登場している。家政婦Presenも第2作と第3作に姿を見せている。また、登場人物はどの作品においても、題名からも当然のように、ブルジョア階級の人ばかりであり、家政婦Presenやマンションの管理人や公園での乞食なども登場するにはするが、Donosoの以前の小説*Coronación*や*Obsceno pájaro de la noche*におけるような対立する2つの階層としての重要性はもっていない。思うに、この作品が書かれた動機の一つとして、彼がこれまで一般に批評家たちから指摘されていたことに対する反論、というよとがあったであろう。もっとも、彼の場合、有産階級と無産階級との対置という形で書いてきた従来の作品においても、いわゆる社会抗議といったイSPANアメリカの伝説的な小説のあり方とは違った信条の下に書かれたものであった。従って、Donosoの関心は、もっと別なところにあったし、今後もそのような態度は恐らく変らないだろう。彼の小説には、文明に対する厳しい批判と、更に人間の生きざまに対する深い関心が窺えるのである。

最後に、Donosoの文体についての若干の考察を試みてみたい。3篇の作品には、すでに第1篇について指摘したように、外来語あるいは外国語がことのほか多く見られると同時に、外国の地名、人名なども決して少なくない。しかしこのことは、この作品を読みづらいものにしていないばかりか、逆に極めてモダンな感じを起こさせるに役立っていることは事実である。何よりもこの作品を読みやすくしているものは、文体のリズムの軽快さである。テンポの早さである。更に彼の文体の特色として、彼が時としてもつ力を連想させる非現実的な状況設定し、その帰結をまるでリアルなものとしてあくまでも追求していることである。すでに安部公房の小説について平岡篤頼氏も指摘しているように、⁵⁾ あり得べかざる出来事を可能にする論理の自発性を、ドノソの作品にも窺うことができる。たとえば、*Chatanooga choochoo*におけるSylviaの突然の両腕の脱落や、Anselmo

の男性のシンボルの喪失,あるいは*Gaspard de la nuit*におけるMauricioと浮浪者との相互の変身はその最も代表的な場合であろう。そこには、カフカの『城』に見られる高い象徴性が投影されている。

〔注〕

- 1) 内田吉彦 訳「この日曜日」 403～407 ページ 筑摩書房世界文学大系 83, 1976
鼓直 訳「夜のみだらな鳥」 443～453 ページ 集英社版世界の文学 31, 1976
吉田秀太郎「ドノソとその周辺」筑摩書房世界文学大系 79, 昭和51年8月
第83巻付録
- 2) 本稿のために用いたテキストは, José Donoso: *Tres novelitas burguesas*,
Seix-Barral. Barcelona, 1^a ed, 1973. である。
- 3) Edmundo Bendezú: *Donoso: Fabulación y realidad*. Fernando García
Gambeiro, Buenos Aires, 1975
- 4) Idem
- 5) 平岡篤頼「安部公房における小説の方法と文体」, 「国文学」, 1956年9月号